

令和元年6月20日現在

機関番号：32644

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13268

研究課題名(和文) グローバル人材に必要な能力の構成要素の分析とそれに基づく評価ツール作成の試み

研究課題名(英文) Analysis of the constructs necessary for global human resources and creation of assessment tools for them

研究代表者

松本 佳穂子 (Matsumoto, Kahoko)

東海大学・国際教育センター・教授

研究者番号：30349427

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：昨今脚光を浴びている「グローバル人材」という概念については、その構成要素の研究があまり進んでいないため、そういう状況が高等教育機関が目指す人材養成の目標や指標を不明確にしている。本研究では、外国語運用能力に加えて、OECDの提唱する汎用能力や「21世紀型スキル」、国内外で開発された異文化間能力、問題解決能力の指標を精査し、それらと、実際に国際的な仕事に携わる300人以上の方々へのニーズ調査を通じて明らかにされた「グローバル人材に必須の要素」を比較・検証・収斂することを通じて、将来の日本を背負う国際的人材の能力要素を教育目標として提唱すると共に、それを測定する評価ツールを数種類開発した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで、各分野で単発的・散在的に行われてきた「グローバル人材」に関する諸研究を、「将来の日本を背負うような国際的人材の要件の確定」というマクロな視点とテスト理論による詳細な統計的分析によって一つに収斂しまとめあげることができた。よって、本研究は各領域における今後の学際的研究に寄与すると同時に、グローバル人材養成教育の指標を求める教育機関や企業などに対して、それを明確な教育目標として示した。更に、それらの要素を測定すべく開発した数種類の評価ツールを選択的に使うことで、教育機関や企業はグローバル人材の指標に対する評価を適切に行い、より現実に即したかつ総合的な教育的判断を下すことができるであろう。

研究成果の概要(英文)：Despite the increasing attention to the concept of global human resources, lack of research on its constructs has hampered the higher education institutions' effort to create clear educational objectives/descriptors for producing truly international-minded youths. Thus, this study, first, established the list of components indispensable to global human resources, by comparing the results of investigation of presently available sources (OECD's Key Competencies and 21st Century Skills as well as various international and domestic studies on intercultural competence, critical thinking and problem-solving skills) with the results of realistic needs analysis based on the responses to online surveys and semi-structured interviews of more than 300 adults who successfully work in the international arena. Secondly, all the components deemed necessary were validated both qualitatively and quantitatively, and several kinds of assessment tools have been created after a series of experiments.

研究分野：応用言語学

キーワード：グローバル人材 構成要素分析 評価ツール構築 実証的ニーズ検証 グローバル市民教育 異文化間能力

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

研究開始当初は、「グローバル人材」という言葉が脚光を浴びる中、その能力の構成要素については、コミュニケーション能力や異文化対処能力、クリティカル・シンキングなどに関する個別研究はあるが、全体を包括するマクロなものは殆どない状況であった。その状況は、高等教育機関が目指すグローバル人材育成の教育目標や方法論にも現れており、各機関がかなり恣意的な判断でそれらを定めていた。計画代表者は、科学研究費補助金基盤研究(B)「言語教育におけるクリティカル・シンキング能力に関する到達目標・評価基準の開発研究(2010-2013)」及び本務校の機関である文明研究所のプロジェクト(2013-2015)において、異文化状況における問題解決能力の構成要素について研究を重ねてきた。

当時も今も、欧米での動き、特に OECD の提唱する汎用的能力(キー・コンピテンシー)(OECD, 2003)や「21世紀型スキル」(Ananiadou and Claro, 2009)、或いは AHELO (OECD 高等教育における学習成果の評価)の基準などを参考に、日本でも汎用的能力や問題解決能力の測定ツールの開発がなされ、また、欧州評議会の付属機関である欧州近代言語センター(ECML)が構築・使用している異文化間能力(Intercultural Competence)の指標や北米の様々なクリティカル・シンキングのテストを利用した教育指標や評価ツールの開発も、特定分野別に進んできている。

しかし、上記のような指標や評価ツールは、英語を中心とする外国語ができることを前提に開発・利用されているので、そのまま日本の目指すグローバル人材育成には利用できないし、それらが想定する能力要素も、複言語・複文化型のヨーロッパと英語中心の北米型ではかなり目指すところが違う。よって、日本のように外国語として英語を使いながらグローバルな世界で活躍できる人材育成を目指す場合に指標となる要素は当然欧米の基準とは重複はあっても違うものとなる。計画代表者は既に様々な分野で活躍する国際的人材約 50 名に事前アンケートやインタビューを実施して、日本のグローバル人材に必要な能力の概観を得ている。本研究では、実際に様々な分野で国際的に活躍している日本人(企業、国際機関、学術関係など)に事前研究による精査を経たアンケートとインタビューを行い、それを欧米の指標と対照しつつ取捨選択及び検証することで、将来の日本を背負うグローバル人材に必要な能力の構成要素を詳細に抽出・記述し、さらにそれを基に様々な目的に使用できる汎用性を持つ「グローバル能力判定テスト」を作成したいと考えた。

## 2. 研究の目的

昨今「グローバル人材」という言葉及び概念のみが脚光を浴びているが、その能力の構成要素の研究は進んでおらず、専門家の間でも想定する能力要素が違うため議論がすれ違うことが多い。このような状況は、高等教育機関におけるグローバル教育の目標を不明確にもしている。本研究では、外国語運用能力に加えて、OECD の提唱する汎用能力(キー・コンピテンシー)や「21世紀型スキル」、国内外で開発された異文化間能力、クリティカル・シンキング、問題解決能力の指標を精査し、そこから収斂した要素と実際に国際的な仕事に携わる人々へのニーズ調査を通じて明らかになった「グローバル人材に必須とされる要素」を対照・検証し、将来の日本を背負う国際的人材の能力要素を教育指標として提唱すると共に、それを測定する汎用的な評価ツール(テスト)を開発することを目指した。

## 3. 研究の方法

初年度は、グローバル人材の要件となる能力構成要素について、OECD の提唱する汎用能力(キー・コンピテンシー)や「21世紀型スキル」を含む様々な欧米の指標と評価ツールを精査し、それと、実際に様々な分野で国際的に活躍している日本人(企業、国際機関、学術関係など)に対するアンケートと半構造化インタビューによる実態調査・ニーズ分析の結果を対照・検討して、今後の日本を背負うべき国際的人材の能力要素を抽出して指標としてまとめた。調査対象者を増やしながら3回にわたって(一回目 30 名、二回目 102 名、三回目 332 名)指標の質的、統計的検証を行い、項目に修正を加えて行った。2年目は、その指標を基にいくつかの試作評価ツールを作成し、多様な被験者に対してその妥当性・信頼性・実行可能性を分析することで、評価ツールの内容だけでなく、指標に対する修正・調整も引き続き行った。3年目は、過去2年間の分析結果を基に最も適切と思われる項目から成る評価ツール(プロトタイプ)を作成してその実地検証と最適化を繰り返した。最終的には、そのように内容や重み付けを調整したテスト項目を教育・評価環境に合わせて組み合わせた数種類の評価ツールを開発し、同時に検証・修正された指標を Can-do リスト型の教育目標としてまとめ上げた。

## 4. 研究成果

### (1) グローバル人材の要件の確定

まず、上に述べたような欧米の様々な指標を精査し、重複やあまり日本の状況に該当しない部分を削除・修正しながら、グローバル人材養成に欠かせないと思われる構成要素を1つの蓋然的リストに収斂した。そのリストに挙げられた要素について、最初は 30 名、次に 102 名の様々な分野で国際的に活躍している方々にアンケートやインタビューを通じて意見を頂き、重みづけをしつつ整理・範疇化を行った。被験者が 30 名の時点では自由に意見を聞き、それを反映した構成要素のリストに対して、102 名の被験者がポイントによる重みづけを行った。その後探索的因子分析を行った結果得た 9 つの範疇が以下である。

表 1. グローバル人材に必要な要件

順位	能力	ポイント
1	問題解決能力 (理解力、判断力、分析力、批判的・理論的思考力など)	343
2	英語コミュニケーション能力	281
3	人間的能力(協調性、柔軟性、積極性、状況適応力など)	260
4	方略的能力(交渉力、統率力、戦略的思考力など)	193
5	日本語コミュニケーション能力	171
6	他の国や他の文化に関する知識	168
7	英語力(テストで測れるような能力)	54
8	英語以外の言語の知識	32
9	その他(自由記述: 持続力、創造性、ガッツなど)	28

その後最終段階として、様々な属性を調整した 332 名の国際的に活躍している方々に更なるアンケートとインタビュー調査を行い、以下の範疇をカバーする 40 項目の指標を構築した。

表 2. グローバル人材の能力の構成要素

<p>1. 異文化間能力</p> <p>1-1. 知識面</p> <p>(1) 英語力</p> <p>(2) ネイティブ・スピーカーから学ぶ必要性</p> <p>(3) 英語以外の外国語の能力</p> <p>(4) 言語一般に関する知識</p> <p>(5) 異文化に関する知識</p> <p>1-2. 態度面</p> <p>(1) 異文化の受容能力</p> <p>(2) 異文化への興味(積極的な態度)</p> <p>(3) 異文化状況への対処能力</p> <p>1-3. 異文化状況におけるクリティカル・シンキング</p> <p>(1) 客観的理解力(受容)</p> <p>(2) 分析力(受容)</p> <p>(3) 客観的表現力(発信)</p> <p>(4) 柔軟な相互交渉能力</p> <p>(5) 継続的学習能力</p> <p>2. 汎用的スキル</p> <p>(1) 客観的理解力</p> <p>(2) 分析力</p> <p>(3) 判断力</p> <p>(4) 論理的・批判的思考力、状況適応能力</p> <p>(5) 交渉力・協調性・統率力</p> <p>(6) 積極性・状況適応能力</p> <p>(7) 統率力・交渉力・思考の柔軟性</p> <p>(8) 戦略的思考力・状況適応能力</p>
--

## (2) 評価ツールの作成と検証

何度かの大学生を使った実験により、40 項目の指標のうち、上記の構成要素の中で異文化間能力に関する部分(1-3)、態度に関する部分(1-2)、及び2の汎用的スキルの中でクリティカル・シンキング能力を含む部分は客観的エッセイ・テストでかなり測定できることが分かったが、長い時間をかけて身に付けてきた知識や認知的能力、一般的思考力に関する部分は Can-do チェックリストとしての評価が現実的だということが明らかになった。よって、5 種類の問題状況を分析するエッセイ・テスト(50 点満点)をいくつか作成し、測定対象の指標を基に開発した採点ルーブリックの評価者間信頼性を測定した。大学生 141 名を使った実験においてクロンバックの信頼性係数が平均すると 0.7 を超えたので、かなりの信頼性が得られたが、信頼性が低かった項目について修正を加えた。

一方、なかなか一回のエッセイ・テストでは測りにくい 23 項目については 4 件法で回答する Can-do 型チェックリストを用意し、上記 141 名の被験者に対して学生の自己評価と教師の評価、28 名の社会人の自己評価と彼らの上司の評価の相関を見た(エッセイ・テストの評価に含まれる指標であっても、長期的観察によりなじむ項目はチェックリストにも含ませて、両方で評価できるようにした)。ここでも相関平均は 0.5 を超えたが、0.3 以下だった項目について修正を

加えた。特筆すべきは、学生と教師の評価の一致度が平均で 0.6 に近かった一方で、社会人の場合は 0.4 ぐらいに留まったことであり、企業における自己評価の難しさの一面が見えた。もともとの指標自体は多くの国際人の支持する項目から構成されているのであるが、様々な局面で多様な仕事をこなす社会人の自己評価には非常に複雑な側面があるのであろう。よって社会人に対する使用の場合は、客観的なエッセイ・テストによる評価と自己研鑽を促すような形でチェックリストの使用が適しているのかも知れない。

### (3) 評価ツールの公開

現在ウェブサイトを通じて、教育目標としての 40 項目の指標と 4 種類のエッセイ・テスト及び自己評価用チェックリストを公開する準備中である。できれば、それぞれの教育環境や状況に応じて、両者を組み合わせて使って頂きたいので、いくつかの理想的な組み合わせを提示する予定である。

## 5. 主な発表論文等

### [雑誌論文](計 4 件)

1. 松本佳穂子 (2018) 「ヨーロッパの異文化理解教育から学べること」、『異文化交流第 19 号』、東海大学国際教育センター発行、pp.137-150. 査読有
2. Kahoko Matsumoto, Yuuki Kato, Shogo Kato & Toshihiko Takeuchi (2018). Creation of Assessment Tools for the Skills Required for Global Citizenship. 第 34 回日本教育工学会全国大会講演論文集 pp.933-934. 査読無
3. 松本佳穂子 (2017) 「大学教育で養成すべきグローバル・スキルの構成要素の探求—異文化間能力の重要性」、『言語をめぐる 章(埼玉大学教養学部リベラル・アーツ叢書別冊 2)』、埼玉大学教養学部・人文社会科学研究科発行、pp.290-302. 査読無
4. Kahoko Matsumoto, Yuuki Kato, Shogo Kato & Toshihiko Takeuchi (2017). Creation of an Assessment Rubric for Global Citizenship. The 22<sup>nd</sup> Pan-Pacific Association of Linguistics Conference Proceedings. pp.26-27. 査読有

### [学会発表](計 11 件)

1. Kahoko Matsumoto and Takeshi Kitazawa (2019). Creation of an Assessment Tool for Global Citizenship. International Conference on Educating the Global Citizen (3月ドイツ)
2. Kahoko Matsumoto, Yuuki Kato, Shogo Kato & Toshihiko Takeuchi (2018). Creation of Assessment Tools for the Skills Required for Global Citizenship. 第 34 回日本教育工学会全国大会(9月東北大学)
3. Kahoko Matsumoto, Toshiyuki Takeuchi, Yuuki Kato & Shogo Kato (2018). Creation of an Assessment Tool for Global Citizenship for Japanese University Students. British Association of Applied Linguistics 2018 Conference (9月イギリス)
4. Kahoko Matsumoto (2018). Creation of an Assessment tool for Global Citizenship for Japanese Students. British Council's Going Global Conference (5月マレーシア)
5. Kahoko Matsumoto and Toshihiko Takeuchi (2018). Attempt to Create an Assessment Tool for Global Citizenship. The 53th RELC International Conference (3月シンガポール)
6. Kahoko Matsumoto (2017). Creation of the Criteria and Instructional Models of Intercultural Competence Tailored to Japanese Students, JALT Brain/CT SIG.招待講演(9月於立教大学)
7. Kahoko Matsumoto, Yuuki Kato, Shogo Kato & Toshihiko Takeuchi (2017). Creation of an Assessment Rubric for Global Citizenship. The 22<sup>nd</sup> Pan-Pacific Association of Linguistics Conference (8月於韓国)
8. Kahoko Matsumoto (2017). A Search for the Components of Global Citizenship. The 15<sup>th</sup> Asia-TEFL International Conference (6月於インドネシア)
9. Kahoko Matsumoto and Toshihiko Takeuchi (2017). The Skills and Attitudes Required of a Global Citizen. The 13<sup>th</sup> A Search for the Components of Global Citizenship International CamTESOL Conference (2月於カンボジア)
10. Kahoko Matsumoto (2016). Global Citizenship Required for Japanese - An observation from the results of a survey targeted to internationally successful people. JACET 教育問題研究会と本科研共同開催のシンポジウム(10月於早稲田大学)
11. Kahoko Matsumoto (2016). The Competencies and Skills Required of a Global Citizen: A Report on the Plurilingual/Pluricultural Training in Europe, An International Symposium on Global Citizenship Education (10月於東海大学)

### [図書](計 1 件)

1. 松本佳穂子 (2016) 「グローバル人材」に必要な能力の構成要素の探究—異文化間能力の必要性—、石川有香・慎一郎他編『言語研究と量的アプローチ』、金星堂 pp.45-60.

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

取得状況（計0件）

〔その他〕

ホームページを現在構築中（夏までに完成予定）

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：竹内俊彦  
ローマ字氏名：Takeuchi, Toshihiko  
所属研究機関名：東京福祉大学  
部局名：教育学部  
職名：准教授  
研究者番号（8桁）：20327290

研究分担者氏名：加藤由樹  
ローマ字氏名：Kato, Yuki  
所属研究機関名：相模女子大学  
部局名：学芸学部  
職名：准教授  
研究者番号（8桁）：70406734

研究分担者氏名：加藤尚吾  
ローマ字氏名：Kato, Shogo  
所属研究機関名：東京女子大学  
部局名：現代教養学部  
職名：准教授  
研究者番号（8桁）：80406735

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：赤堀侃司  
ローマ字氏名：Akahori, Kanji  
研究協力者氏名：マイケル・バイラム  
ローマ字氏名：Michael Byram  
研究協力者氏名：クリフォード・ヒル  
ローマ字氏名：Clifford Hill  
研究協力者氏名：北澤武  
ローマ字氏名：Kitazawa, Takeshi  
研究協力者氏名：大野秀樹  
ローマ字氏名：Ohno, Hideki  
研究協力者氏名：長沼君主  
ローマ字氏名：Naganuma, Naoyuki

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。